宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書　第81集

# 西山古墳発掘調査報告書

（小倉町西山74－41他）

2010

宇治市教育委員会

西山古墳石室（北西より）

# 序

小倉・伊勢田地域では、発掘調査などで古墳が10基ほど確認されています。いずれも宅地造成などによる削平を受けた状態で見つかっていますが、西山古墳は、そのような開発行為による削平を免れ、現存している数少ない古墳のひとつです。その背景には、今から50年ほど前に、市民の方が、古墳を含むその土地を買い取られ、荒廃していた墳丘に、土を盛るなどの復旧を行い、古墳の保存管理をしてこられた経緯があります。

今回の発掘調査は、古墳内部の状態を把握することを目的として、平成22年度の国庫補助事業により実施いたしました。その結果、古墳の埋葬施設の構造やその遺存状態が比較的良好であったことなどが明らかとなり、小倉地域の歴史的環境を知る上で、重要な成果になるものと考えます。今後、西山古墳が、宇治市域における貴重な文化財として、多くの皆様に周知していただけるよう、本書が一助となれば、幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査にご協力していただいた土地所有者の方、町内会の皆様、ならびに調査期間中にご指導、ご助力いただきました関係各位に対し、心より厚く御礼申しあげます。

平成23年3月

宇治市教育委員会

教育長　石　田　　肇

# 例　言

1．本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書の第81集にあたる。

2．本書は、宇治市教育委員会が平成22年度に実施した国庫補助事業による西山古墳の発掘調査の成果をまとめたものである。

3．本書で使用する座標は、ＩＴＲＦ（国際地球基準座標系）に準拠した世界測地系国土座標第Ⅵ系を用い、地図中で方位記号の指し示す方角は、座標北である。また、高さの基準面には、東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ．）を用いた。

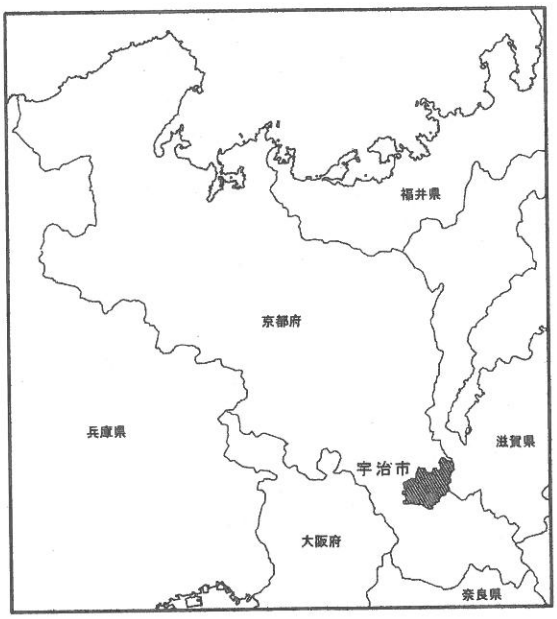
4．本書は、発掘調査の記録である基本的な写真を図版として後半に取りまとめ、図面は本文中の挿図として収録することとした。

5．本書収録の遺構図面は、現地でデジタル測量した図面を下図とし、整理作業によって変更を必要とした部分には修正を加え、トレースによって仕上げた。

6．本書に収録する遺物の実測は、大下あかりと桑宮慶一が行い、トレースは桑宮慶一が行った。

7．本書の図版に収録する遺物写真は、寿福写房（寿福　滋）に撮影委託した。

8．本書の編集・執筆は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当し、実務を桑宮慶一が行った。




宇治市の位置

# 本　文　目　次

第１章　はじめに

Ａ．調査に至る経緯 …… 1

Ｂ．発掘調査の経過 …… 2

Ｃ．発掘調査の実施体制 …… 2

第２章　位置と環境

Ａ．西山古墳の概説 …… 3

Ｂ．小倉・伊勢田地域の歴史的環境 …… 3

第３章　調査の成果

Ａ．墳丘盛土および石室内埋土 …… 5

Ｂ．埋葬施設 …… 7

Ｃ．出土遺物 …… 9

第４章　まとめ …… 10

# 挿　図　目　次

第１図　西山古墳位置図 …… 1
第２図　西山古墳とその周辺 …… 3
第３図　主要遺跡と古代の地形想定図 …… 4
第４図　墳丘地形測量図 …… 5
第５図　墳丘および石室内土層図 …… 6
第６図　墳丘平面図 …… 7
第７図　石室実測図 …… 8
第８図　出土遺物実測図 …… 10

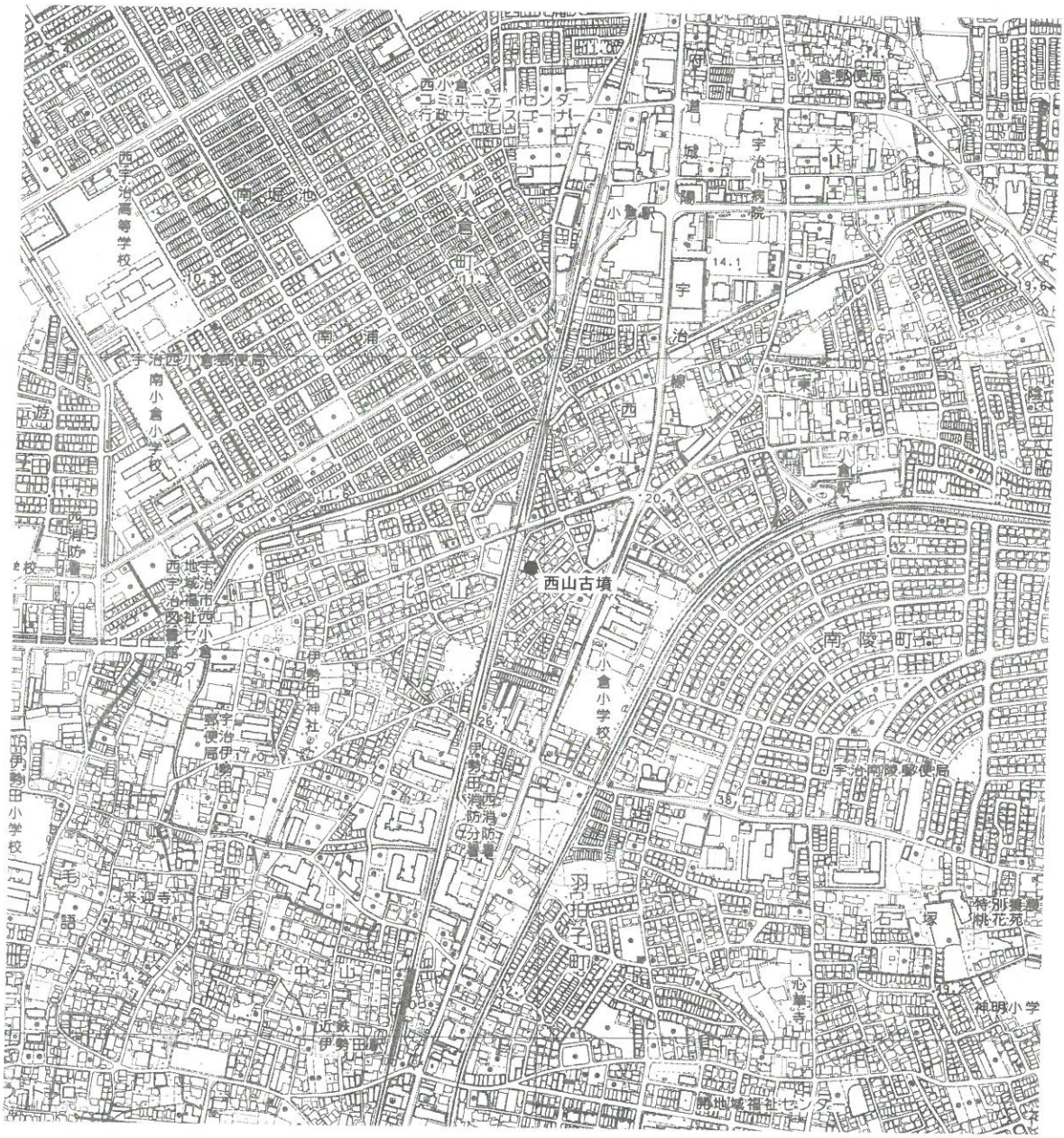
# 図　版　目　次

PL.　1 …… 検出状況
PL.　2 …… 石室１
PL.　3 …… 石室２
PL.　4 …… 土層断面
PL.　5 …… 出土遺物

# 第1章　はじめに

## A．調査に至る経緯

西山古墳は、宇治市小倉町西山74－41、75－6に所在し、現在、この場所は市民の所有地である。昭和30年ごろに、古墳を含むこの一角が買い取られ、土地所有者によって、古墳の維持管理が行われてきた。平成20年10月30日、行政管理の下で、古墳の保存をお願いしたいと土地所有者から宇治市歴史まちづくり推進課に寄付の申し出があった。これを受けて、西山古墳の対処方針について協議を重ねた結果、まず発掘調査を実施し、その調査成果に基づき、今後の方向性を決定することとなり、平成22年、国庫補助事業による発掘調査の実施に至った。




第１図　西山古墳位置図（1：10000）

## B．発掘調査の経過

発掘調査は、平成22年11月10日、古墳の現形状を記録するための地形測量を行い、翌11月11日より、人力による墳丘掘削を開始した。墳裾部の南側に、石室に使用されたと思われる石が露出していたため、その石を基点として、トレンチ設定を行い、盛土掘削を進めていった。しかし、その石から続くはずの石の列が見つからず、改めて石室を見つけるため、墳裾部において、掘削範囲を広げていくこととした。そして、墳裾部の南東側にて、羨道部の左右側壁の一部を検出した。左右側壁幅の中心を通る軸を基線として、幅４ｍほどのトレンチを再び設定し、石の列を追うように、墳丘内部に向かって、盛土の掘削を進めていった。しかし、調査地内は狭小で、排土を仮置きできる範囲に限界があるため、石室の形態が判明した玄室半ばほどまでで盛土掘削をやめ、その掘削範囲内で調査を行うこととした。石室内埋土を含め、掘削作業が終了した段階で、測量作業を行い、続いて、写真撮影を行った。調査成果の報告および現地の公開は、報道機関を対象として12月8日に、近隣住民を対象としては、12月11日に実施した。墳丘の埋め戻し作業は、12月13日より開始し、21日に終了した。現場の撤収も埋め戻しが終了した同日に行い、発掘調査を終了した。

## C．発掘調査の実施体制

現地の発掘調査については、宇治市歴史まちづくり推進課が直接担当し、発掘調査の土砂除去作業や記録作成作業など、発掘調査に必要な標準作業及び作業の運営管理全般を、専門業者に委託した。発掘作業は発掘担当職員の指示監督の下、委託業者が組織した作業長１名、作業員４名程の人員で行った。発掘調査の体制は下記のとおりである。

発掘調査主体者：宇治市教育委員会
発掘調査責任者：宇治市教育委員会　教育長　石田　肇
発掘調査事務局：宇治市都市整備部　部　長　小川　茂
都市整備部参事兼歴史まちづくり推進課長　木下健太郎
発掘担当者：歴史まちづくり推進課主幹兼文化財保護係長　杉本　宏
文化財保護係　主　査　荒川　史
調査員　永野　宏樹
調査員　桑宮　慶一

発掘整理員：大下あかり、山本綾子、吉岡明日美

（協力関係者）小倉中央台町内会、株式会社　森半、宇治市立小倉双葉園保育所

# 第2章　位置と環境

## A．西山古墳の概説

西山古墳は、伊勢田町との境界に近い丘陵上にあり、宇治市小倉町西山の小倉共同墓地の南西、小倉中央台住宅地の一角に位置する。小倉から伊勢田にかけて、複数基あった古墳の中で、形状として残る唯一の古墳である。

第２図　西山古墳（写真中央）とその周辺（昭和21年 米軍撮影）

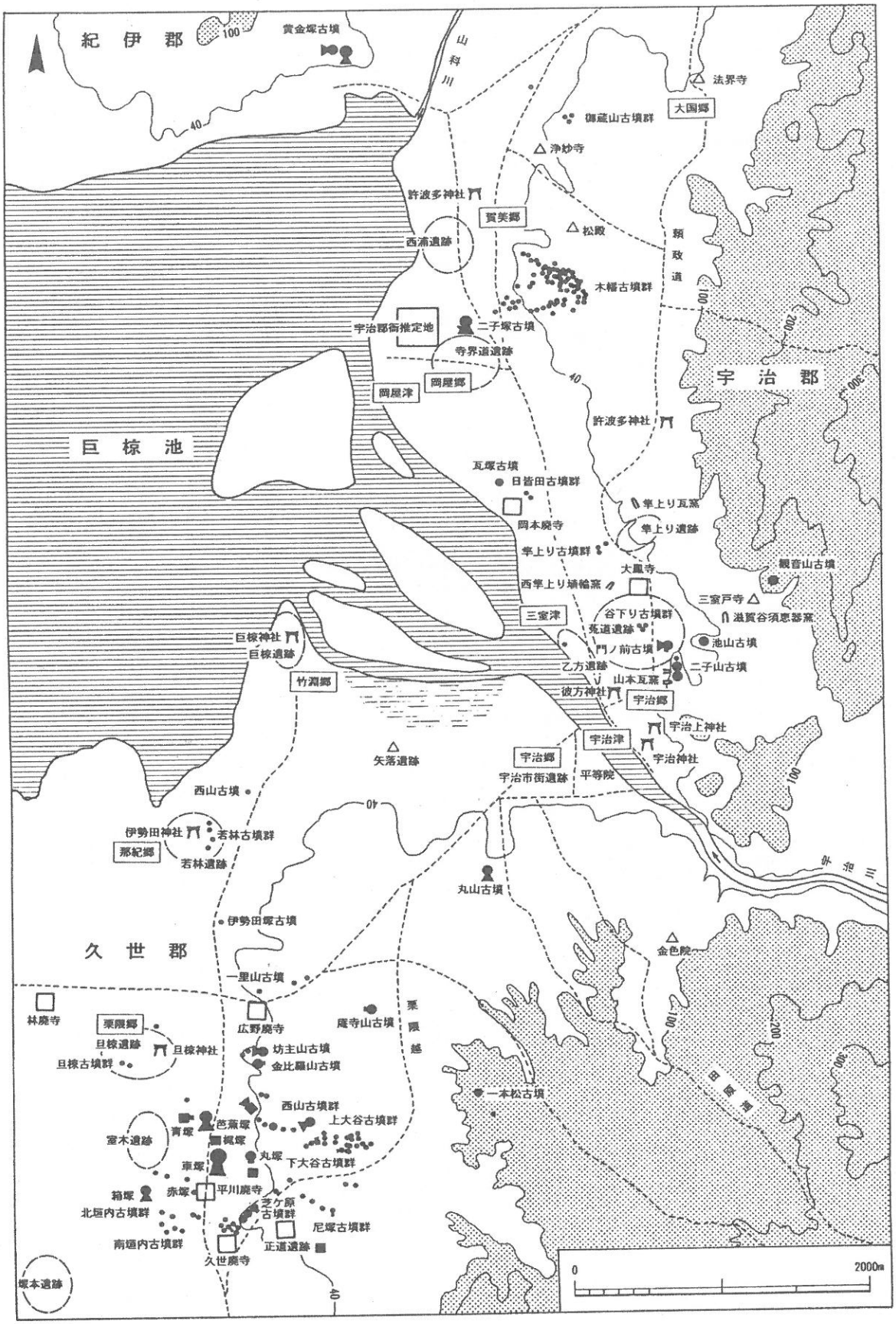
現在、住宅地となっているこの丘陵地は、戦後間もないころは、竹薮に覆われていて、その丘陵の南斜面に小山状の塚が２つ並んでいたといい、「石のからと」や「マンジュウ塚」と呼ばれていた。これらの墳丘２基のうち、どちらに当てはまるか不明だが、１基は削平を受けて消滅し、現存している１基が西山古墳にあたるものと考えられる。墳丘の封土は、早くに盗掘などを受けて甚だしく破壊され、石室部分が開口していたようである。副葬品と思われる剣が出土し、京都府庁に届け出たと伝えられているが、正式な発掘調査が行われていないため、詳細は不明である。

## B．小倉・伊勢田地域の歴史的環境

この地域の最古の遺跡は、弥生時代にさかのぼる。西山古墳から南西 0.5km の地点に若林遺跡がある。宇治丘陵の北西端に位置し、丘陵と平野部の境を跨って広がる集落遺跡である。ここでは、弥生時代中期の住居跡、弥生時代後期の方形周溝墓が発掘されている。北北東１kmの位置には、神楽田遺跡、その北側に巨椋神社式内社の周囲に広がる小倉遺跡が展開する。旧巨椋池に突出した岬上の微高地上に成り立っており、ともに弥生時代の集落跡を確認している。

古墳時代では、早くから伊勢田神社付近で土師器や須恵器の採集がされており、古墳時代の集落の存在が認識されていた。その伊勢田神社の東側に展開するのが、若林古墳群である。削平を受けた古墳時代後期の小型方墳が２基発見されている。他にも同様な未発見の古墳が存在する可能性は高い。若林古墳群の南には、古墳時代前期から中期の大谷古墳群が展開する。平成６年度の発掘調査において、発見された土坑墓１基から玉類がまとまって出土している。西山古墳の南１kmに位置する伊勢田塚古墳は、棺のみが単独で発掘された古墳である。棺の埋設深度が浅いところから、墳丘は開墾等により失われたものと考えられる。棺は合口式の土師質陶棺で、四柱屋根形陶棺と呼ばれるものである。出土例は極めて少なく、市の重要文化財指定を受けている。概ね７世紀初頭に比定されている。

古墳時代以降は、若林遺跡では、奈良時代の円面硯の出土や掘立柱建物の発掘などにより、奈良時代まで継続する集落跡ということが明らかとなり、神楽田遺跡や小倉遺跡も平安・室町時代まで集落が存続したことが明らかとなっている。

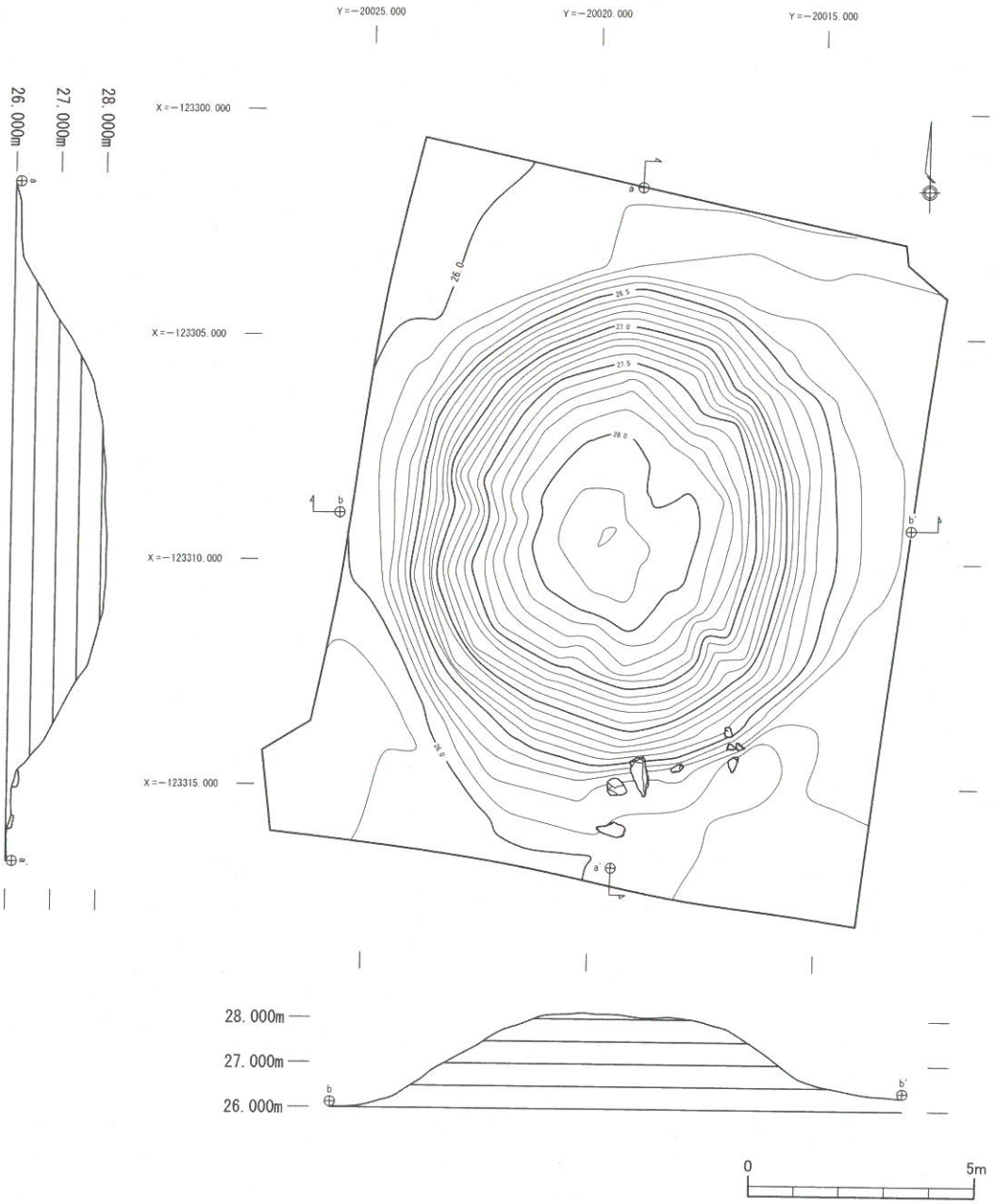



第３図　主要遺跡と古代の地形想定図

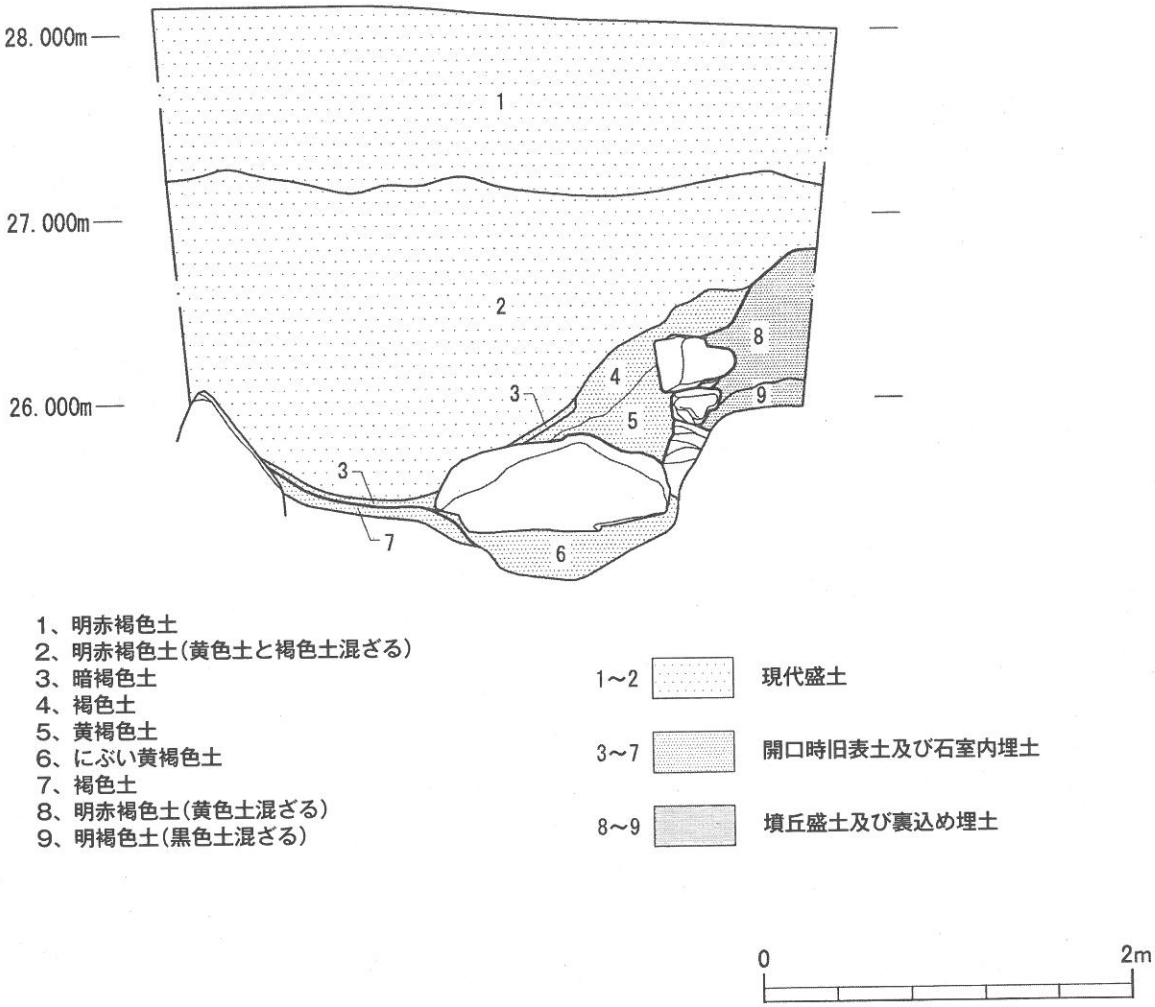
# 第3章　調 査 の 成 果

## A. 墳丘盛土および石室内埋土

墳丘の形状および規模は、南北径12m、東西径10mと南北に長い楕円形状である。標高は、墳裾部の低いところで約26m、墳頂部で約28mと比高差は２mほどである。墳裾部の南側から南東側の表土面にかけて、数点ほどの礫の存在が認められた。一ヶ所にまとまって、突出しているように見えたので、石室で使われた石材が露出しているものと思われた。しかし、礫の一部に、コンクリートの付着が認められたため、現代に何らかの利用後、墳丘盛土に埋められたものであることがわかった。




第４図　墳丘地形測量図



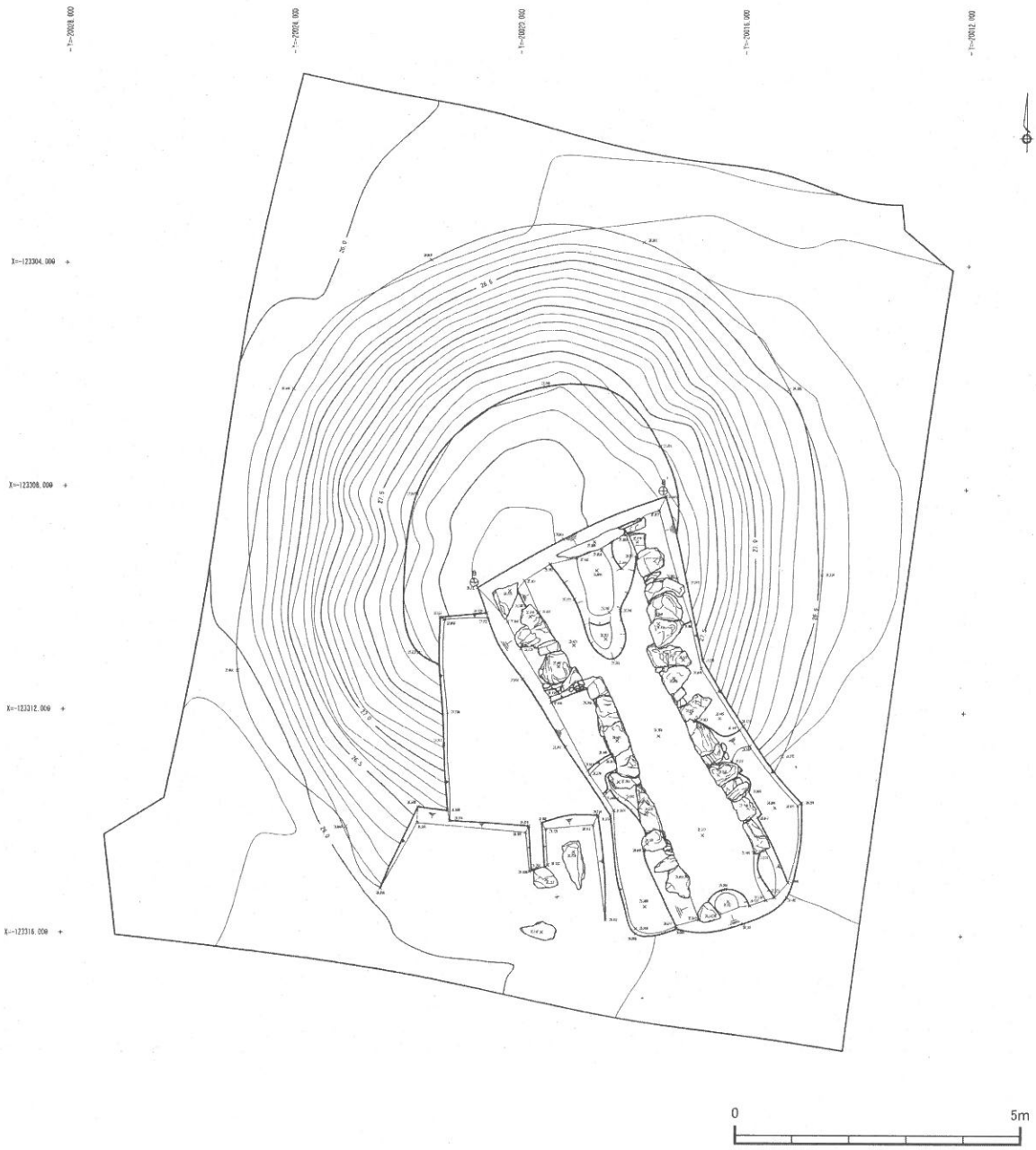

第５図　墳丘および石室内土層図

墳丘盛土が、古墳築造時の盛土でないことは、調査トレンチ壁面の土層堆積状況からも読み取ることができる。図の１層と２層は現代盛土である。若干の差異が認められるものの、基本的には同質の土である。出土遺物は、弥生土器片などの古相の遺物のほかに、現代の緑色ガラス瓶の破片も混在していた。層幅は、１層と２層を合わせて、2.7mになり、その深さは、石室内底部にまで及んでいる。開口していた石室に土を盛り、現在の形状に復旧した痕跡をうかがえる。３層、４層および８層は、復旧される以前の旧表土である。５層と６層の間に挟まれた状態で堆積している礫は、石室の石材として、使用されたものと思われ、石室内に崩落した石材であると考えられる。石室内の地山面の直上に堆積している７層の埋土から、わずかながら瓦器椀の破片が出土していることから、中世に古墳の再利用が行われていた可能性が考えられる。８層と９層は、古墳築造時の裏込め埋土かあるいは盛土が削平されずに残っているもので、その残土高は、玄室の左側壁側で、石室内の７層下の地山上面から1.5mほどである。今回の調査において、石室内から、副葬品などの遺物が見つかっておらず、このことからも、西山古墳が、盗掘や石材の抜き取りなどによって、長期にわたり、荒廃していた状況が想像される。

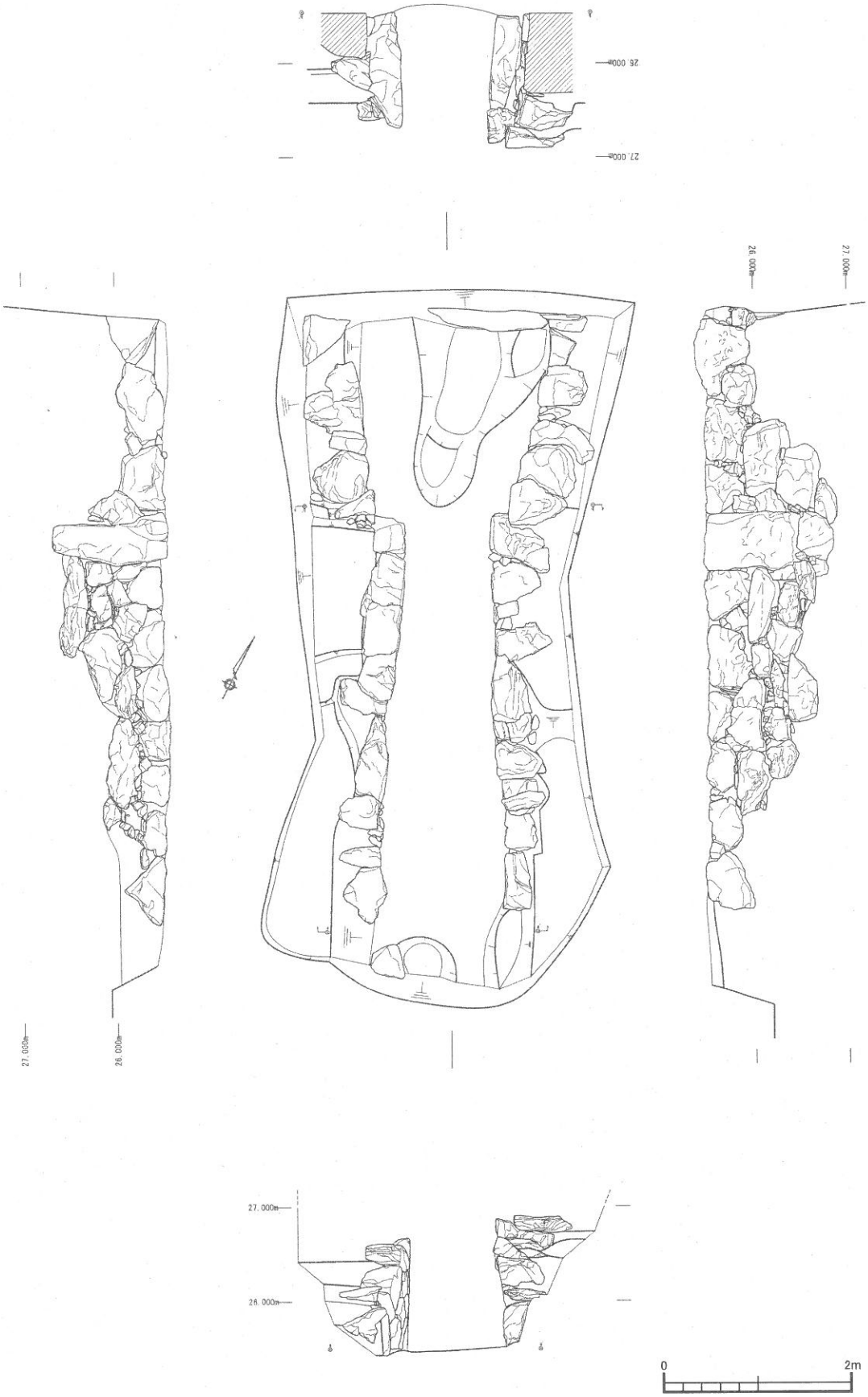
## B．埋葬施設

埋葬施設である石室の形態は、両袖式の横穴式石室である。全掘削を行っていないため、全長は不明であるが、検出された長さは、6.5mを測る。入口は、南南東に開口しており、石室の主軸は、座標北から東へ25°偏する。石室の遺存状態は比較的良好で、全体的に基底石はほぼ残っており、特に遺存状態のよい玄門付近では、側壁の石材が、３段から４段ほどが残っていた。天井石は、掘削範囲内においては、見つかっていない。

検出された玄室長は、2.3m、玄室幅は、玄門寄りで1.7m、奥壁寄りの部分で2.1m、玄室の側壁の残存高は、右側壁１段で0.5m、左側壁玄門寄りで、４段1.4mを測る。玄室平面形は、玄門




第６図　墳丘平面図




第７図　石室実測図

から奥壁に向かって、広がりを持つ形体を呈している。羨道部は、羨道長4.2m、羨道幅は、玄門寄りで1.1m、入口で1.3m、残存高は、玄門寄り付近で、1.2mを測る。側壁は、下段から上段に向かうにつれて、幅が狭くなる持ち送り構造をしており、羨道部の平面形・立面形は、ともに入口に向かって外開きの状態を示している。

石室の石材は、主にチャートであるが、砂岩の使用も認められる。石室の構築については、大型の石材を、平坦な面が壁面となるように段積みし、その隙間に小型の石を詰めている。大型の石材には、角の取れた自然礫や割り石が使用されている。詰め石として使用されている小型の石材には、大型石材と同様の自然礫や割り石のほかに、平坦面を作り出すために、研磨加工の施された石材の使用も認められる。

詰め石や玄門柱石を除く石材の法量は、長軸が100cmを越えるものもあるが、50cmから70cmほどの石材が多くを占める。石室の構築部分によって、石材の大きさを使い分けているといった規則性は認められない。玄門柱石は、左右両側に据えられており、左側壁で高さ1.0m、右側壁で1.2mと右側が高い。

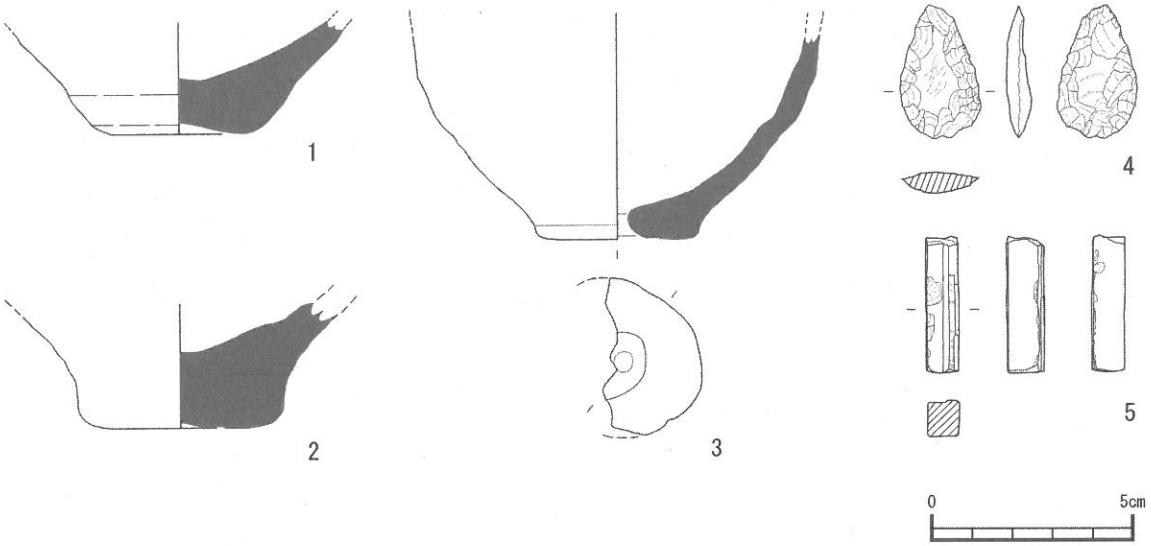
玄室の床面は、礫床などの痕跡となるものは見つかっていない。羨道入口付近に、拳大の礫が集積して埋まっている土坑が見つかっているが、埋土内に、未腐食葉が混入していたため、新しい時期に埋められたものであると思われる。石室内の床に敷くために利用した礫が、何らかの作用を受けて移動し、土坑に埋められたものとも考えられるが、古墳との関連性は不明である。

玄門から羨道部にかけて、幅0.3mから0.5mほどの溝状遺構が検出されている。掘削を行っていないため、深さなどは不明だが、排水溝であると考えられる。

## C．出土遺物

今回の調査では、古墳に関係すると思われる遺物は、現時点では見つかっていない。出土遺物の総量は、コンテナバット１箱であり、古墳を覆っている現代盛土内からの出土がほとんどである。土器に関しては、細片や損傷の激しいものが多く、時期や種類の特定ができるものは少ない。ここでは、石器を含む図化できた５点を報告する。

１，２は、弥生土器の壺の底部である。ともに平底で、底径は、１が3.3cmで、２は3.4cmを測る。２点とも、内外面の損傷が激しいため、調整は不明である。弥生時代後期と思われる。３は、有孔鉢の底部である。底部の中央部に、径0.5cmの孔を穿つ。穿孔は、焼成後に施される。内外面ともに損傷が激しいが、外面の一部にハケ調整痕が残っている。庄内期中葉。４は、サヌカイト製の打製石鏃で、基部が、丸みを帯びている円基鏃である。法量は、器長3.24cm、器幅は1.88cm、器厚が0.5cmである。表裏面とも、周辺部に調整を施す。先端部は欠損している。弥生時代のものと思われる。５は、用途不明の磨製石製品である。形状は、角柱状を呈しているが、両端部が欠損しているため、原形は不明である。側面４面のうち、３面は全体を平坦に研磨加工が施されている。側面１面だけは、半面までが平坦に研磨加工され、残り半面部分は、外側に突出している。突出部分の端面は、刻み目を入れて加飾しているようにもみえるが、擦り切りの痕跡が残っているよ




第８図　出土遺物実測図

うにもみえるため、未成品の可能性も考えられる。残存法量は、3.25cm × 0.8cm × 0.9cm である。

# 第4章　ま　と　め

西山古墳は、主体部に伴う埋葬施設の構造は、両袖式の横穴式石室で、その規模は、調査を行っていない部分を含めると、玄室の長さは4.5m、石室全体の長さは８ｍから９ｍになり、墳丘の直径が、16mから18mほどの円墳であったと推測される。築造時期は、石室の形態などから、古墳時代後期（6 世紀後半から 7 世紀初頭）ごろと考えられるが、副葬品などの遺物が出土していないため、被葬者の社会的地位や性格などは明らかにはできなかった。それとは別に、古墳の復旧に使われた現代盛土の中からは、弥生土器が比較的多量に出土しており、搬出元は不明だが、近い場所から土を運搬し、使用したものと思われるため、古墳周辺に弥生時代の未確認の遺跡が存在する可能性は高いと考えられる。今回の調査は、西山古墳の石室の構造およびその遺存状態が明確になったことにより、古墳時代後期の小倉・伊勢田地域を治める権力者の存在を改めて確認できたと同時に、西山古墳が歴史的価値の高い文化財として、考古学的な側面から証明できたという点において、意義深い調査であったといえるだろう。

## 参考文献

「習俗と伝承」『宇治市史』6　宇治市　1981

「若林遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第31集　宇治市教育委員会　1995

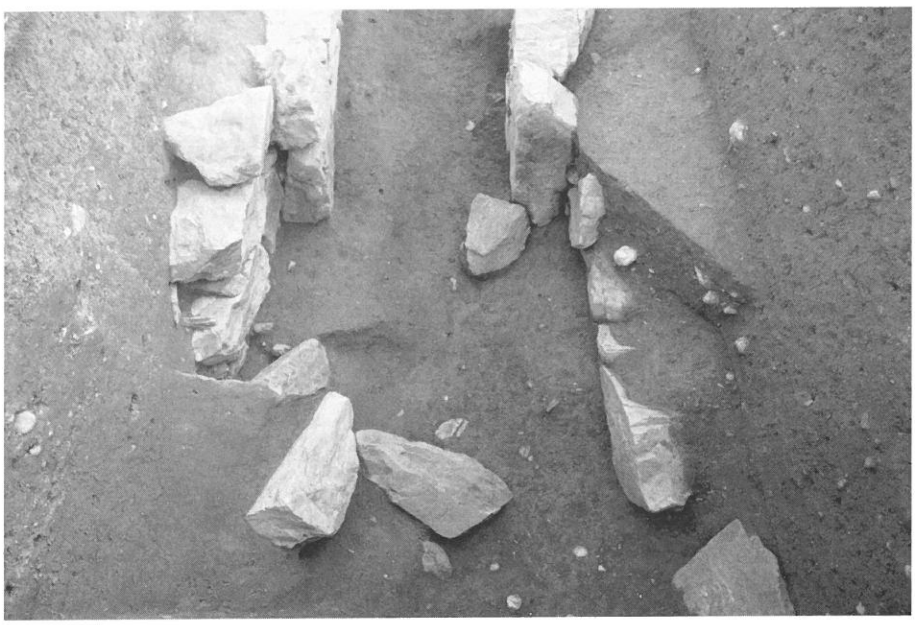
「若林遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第40集　宇治市教育委員会　1998

# 写　真　図　版

検出状況

調査前風景（南東から）

石室側壁検出（南東から）



崩落石材検出（北西から）

石室1

石室完掘（北西から）

石室完掘（南東から）

石室羨道部完掘（南東から）

石室2

石室玄室部完掘（南東から）

石室玄室部玄門（北西から）

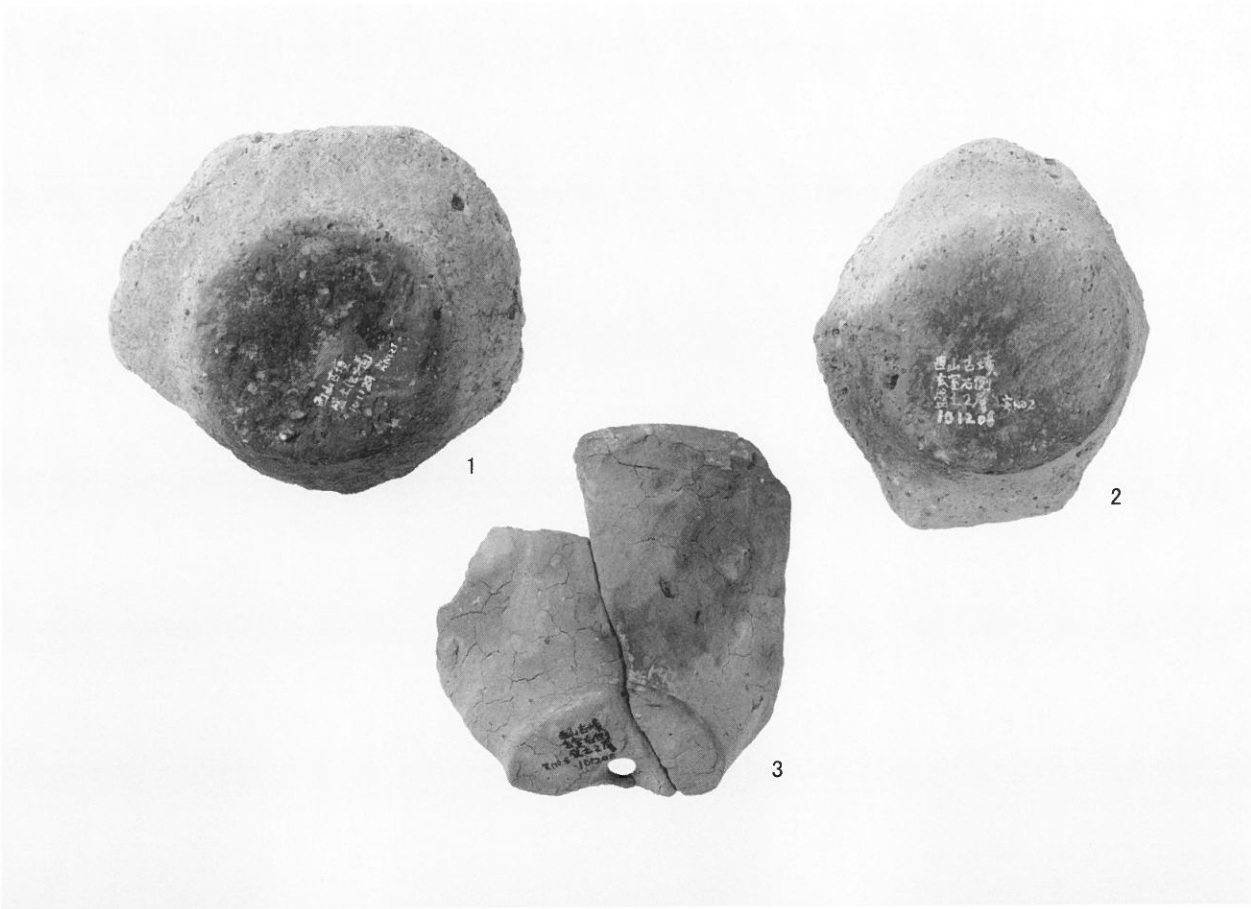
石室羨道部入口（南東から）

土層断面

玄室部北西壁（南東から）

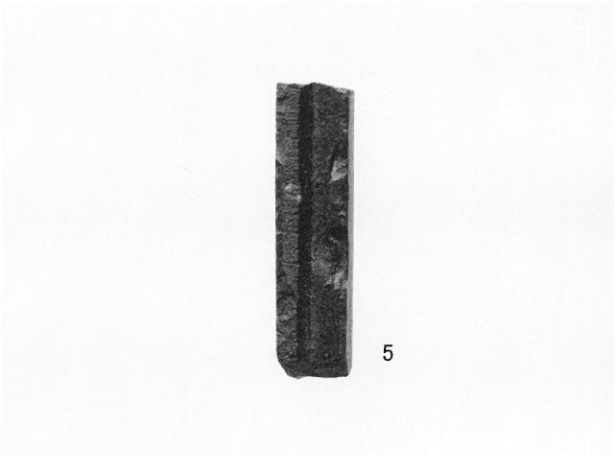
玄室部北東壁（南西から）

玄室部南西壁（北東から）




土器類

打製石鏃




不明石製品

# 抄　　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | にしやまこふんはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 西山古墳発掘調査報告書 |
| 副書名 | |
| シリーズ名 | 宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第81集 |
| 編著者名 | 桑宮　慶一 |
| 編集機関 | 宇治市都市整備部　歴史まちづくり推進課 |
| 所在地 | 〒611－8501　京都府宇治市宇治琵琶33番地 |
| 発行者 | 宇治市教育委員会 |
| 発行年月日 | 西暦　2011年　3月　31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村コード | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 期間 | 面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 西山古墳 | 宇治市小倉町西山74－41、75－6 | 26204 | 117 | 31度53分16秒 | 129度17分18秒 | 20101110～20101221 | 25㎡ | 国庫補助事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記 |
|---|---|---|---|---|---|
| 西山古墳 | 古墳 | 古墳時代後期 | 横穴式石室 | 弥生土器、石器 | |

| | |
|---|---|
| 成果要約 | 主体部に両袖式の横穴式石室を持つ円墳であることが明らかとなったが、副葬品などの石室内遺物が今回の調査では発見されていないため、被葬者の特徴などは不明である。 |

# 西山古墳発掘調査報告書

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書　第81集

発行日　2011年3月31日

発行者　宇治市教育委員会
〒611-8501　京都府宇治市宇治琵琶33番地

編　集　宇治市都市整備部　歴史まちづくり推進課
〒611-8501　京都府宇治市宇治琵琶33番地
TEL　0774－21－1602
FAX　0774－21－0400
e-mail　rekimachi@city.uji.kyoto.jp

印　刷　有限会社　新進堂印刷所
〒611-0021　京都府宇治市宇治妙楽9番地